

聖書の中の昆虫

1. 出てくる昆虫の色々



本の世界のベストセラーであり、ロングセラーである聖書に出てくる動物は沢山いますが、昆虫については当時どのような認識で書かれていたのでしょうか。人間との関わり合いについて調べてみましょう。

ここでは、日本聖書刊行会発行の聖書(新改訳)1982年と American Bible Society 版の Good News Bible (Today's English Version)を参考にしました。

種名	旧約聖書	新訳聖書	備考
あぶ	出エジプト記 8:14	-	アブにもいろいろあり、 ○人や家畜の血を吸うもの ○花の蜜を吸うもの ○小虫を捕食するもの など沢山あり、どの種かは不明。
あり	箴言 6:6~8	-	聖書の中では評価が高い。
いなご	出エジプト 10:13 ~15 出エジプト 10:19 レビ記 11:22 詩編 78:45	マタイ 3:4 マルコ 1:6	サバクトビバッタ(飛蝗:ひこう)の誤訳か? サバクトビバッタは体長♂35mm、♀50mm。イナゴ科のものは大発生しない。 このトビバッタは大地に大害をもたらすと同時に、当時の人々の食料にもなっていた。 パールバックの小説「大地」に出てくる「イナゴの大群」とはサバクトビバッタのことで、イナゴは大群を作って飛び回る習性はない。 GNBでは locust でいなご、バッタとなっている。
くまばち	出エジプト 23-28	-	スズメバチの誤訳か。 GNBでは hornet とあり、明らかにスズメ

			バチである。
しみ	イザヤ書 50:9	-	イガの幼虫で毛織物を食害する。
のみ	サムエル記 24:14	-	つまらないものの喩えに使用。
はえ	詩編 105:31 イザヤ書 18:1 エレミア書 46:20	-	ある場所ではイエバエを、またある場所では吸血性のアブやカに用い、伝染病を持つツェツェバエであるともいわれており、文章をよく読む必要がある。 イザヤ書ではツェツェバエか。 エレミア書では stinging fly。ブヨか。
ぶよ	詩編 105:31	マタイ 23:24	ブユの俗称。刺されるとひどく痒い。 GNBではgnat。英語で蚊の場合もある。 マタイのぶよは GNB ではflyである。
蜜蜂	出エジプト 3:8	-	カナンの地のことを「乳と蜜の流れる地」と呼んでいる。 古代人にとって蜂蜜は、果物を除く唯一の甘味。
はち	申命記 1:44 詩編 118:12	-	野生の蜜蜂かスズメバチか？

なお、表中で 8:14 などは8章14節のこと。また、GNBはGood News Bible の略です。

以上のように、昆虫はそのほとんどが旧約聖書に出てきます。新約聖書にはマタイとマルコにちょっと顔を見せるだけです。遊牧民にとって、自然に産する蜂蜜は、古くから貴重な栄養源とされ、洗礼者ヨハネもイナゴと野密(自然に産する蜂蜜)を食料にしていたといえます。これらの昆虫たちは直接生活に密着したものばかりですが、我々にもお馴染みのものが多いようです。蝶など、どちらかという人間の生活に直接関係しないものは登場しませんでした。聖書の時代というのは、生きることで精一杯で、「蝶を愛でる」などといったことなど考えられなかった時代だったのででしょうか。

それでも、生物学も発達していなかった時代の記述としては、昆虫を害虫として見るだけでなく、食用としても利用するという確かな知恵を持っていたようです。

2. マナとカイガラムシ



カイガラムシは果樹を始め多くの庭木にも寄生するので皆さんもご存じだと思います。我が家の庭木のモチノキが2001年の夏の終わり頃からカイガラムシにやられてしまいました。駆除に失敗し、年が明けていよいよ2月、マシン油で再度駆除することになりました。

皆さん、カイガラムシが昆虫であることを知っていますか。秋から冬にかけて見られる姿は脚もなく、とても昆虫とは思えませんね。第一、あの白の蠟(ろう)の固まりの中にどんな虫が入っているかを想像することすら出来ません。カイガラムシは、幼虫は動けるのですが、吸汁を始めると共に脚は退化して動けなくなります。脚が退化すると削り落とせばもう移動できませんから大丈夫です。また、雄と雌では成長の過程が大きく異なります。これを下表に示しておきましょう。

カイガラムシ	雄 (♂)	卵-幼虫-蛹-翅のある成虫
	雌 (♀)	卵-幼虫-未成熟成虫-翅と脚が退化した成虫

彼らは長い口吻を植物の組織(篩管)の中に差し込んで糖やアミノ酸のような栄養分を横取りしています。必要な蛋白を得るために大量の不要な炭水化物を取ることになり、これを消化管にあるろ過室で濃縮して、蜜として定期的に排泄します。これは「甘露」(honey-dew)と呼ばれています。

良く知られているようにアブラムシとアリはこのような排泄物を仲立ちとして共生関係を結んでいます。ある種のカイガラムシ類にもアリとこのような関係を持つものがあります。

マナの正体は、カイガラムシが出す排泄物ですが、排泄するとき急速に触手が閉じるので、その力で甘露は少し離れた場所まで飛んで行きます。自分の体には甘露がつかないようにしているのです。昼間はマナが落下するとアリがせっせと運んでしまうので、ほとんど見かけることはありません。

「甘露」は葉の表面などに付くと糖分が多いため、黒黴の絶好の餌となり、「すす病」と呼ばれる症状をもたらします。我が家のモチノキもご多分にもれず、「すす病」に罹っています。その名の通り、黒いすすを葉っぱに蒔いたような状態です。

ファールもカイガラムシは菌でかむとちょっと苦みのある甘い味がするといっています。さらに彼はこの虫を一番妙な昆虫の一つであるとよび、ほとんど美味といえるこの果実は、動物で、昆虫だというコメントを残しています。

さて、旧約聖書出エジプト記で、荒野を彷徨うイスラエルの民の前に天与のもののようにあらわれる植物がマナです。16章14節によれば、「その一面の露が上がると、見よ、荒野の表には、地に降りた白い霜のような細かいもの、うろこのような細かいものがあった。イスラエル人はこれを見て、これは何だろうと互いにいった。彼らはそれが何か知らなかったからである。モーゼは彼らにいった。これは主があなた方に食物として与えてくださったパンです。」。

イスラエルの民の前に現れた食物(マナ)は、カイガラムシの消化液が樹液と結合して出来る分泌物です。マナは早朝の気温が低い時間に結晶し、固まりになって枝から大量に落ちるそうです。

現在の「ロウソク」は、ほとんど石油から作られています。ところがロウの字は「蠟(ロウ)」と書きます。何故虫偏なのでしょう。もともと、ロウはイボタという木に寄生する「イボタカイガラムシ」という昆虫の雌が、その体のまわりに分泌してできたものです。その後、ハゼの木から木ロウを取ったり、蜂蜜から取ったりする方法が研究されました。しかし、文字には、昆虫から取った時代の名残が残っています。



1960年代、フォークソング華やかなりし時代がありました。ジョン・バエズやボブ・ディランの時代です。その当時ピーター・ポール&マリーというグループがあったのをご存知だと思います。

私が20代の頃でしたが、当時この名前を聞いたときはびっくりしました。「随分ふざけた名前だなあ」と思ったからです。ピーターとはペテロのことであり、ポールとは「パウロなくしてキリスト教なし」といわれたパウロ、マリーとはもちろんイエス・キリストの母、聖母マリアの名前だからです。

ところが、欧米人の名前をよく見てみるとピーターやペーター(ペテロ: Peter)、ジョン(ヨハネ: John)、マリー(マリア: Maria)、ルーク(ルカ: Luke)、マシュー(マタイ: Matthew)、マーク(マルコ: Mark)など使徒の名前が普通に使われており、驚くにあたらないことが分かり、ほっとしたことを覚えています。
